

## 川崎市文化協会会長賞受賞作品

### 「ぼくの大好きな多摩川」

下布田小学校 6年生 鈴木 成

ぼくの家は多摩川のすぐ近くにある。小さいころから、父と母と姉の四人で、多摩川に遊びに行った。ぼくは虫やメダカを捕るのが得意だった。姉は名前の知らない黄色い花をよくつんでいた。多摩川のメダカは、ぼくの通う小学校の中にある「せせらぎ観察園」のメダカより、四倍近く大きかった。

2年生になって、ぼくは地元の少年サッカーチームに入団した。川崎市内でも強豪といわれるチームだ。学校が休みの日で、試合のない日は、練習場所である多摩川の河川じきで朝から、日が沈むまでボールをけた。練習はつらかったが、ぼくには楽しみがあった。お昼休みの自由時間に仲間と鬼ごっこをしたり、バッタを捕まえたりすることだ。多摩川には、いろいろな虫や草や花があった。ぼくはサッカーも好きだったけれど、虫や草や花にも興味があった。

3年生になって、ぼくは夏休みの自由研究で、多摩川の生物や植物を観察することにした。ぼくは4月から毎月、父や母、たまに姉と一緒に多摩川へ観察に出かけた。季節ごとに多摩川にいる生き物や植物は変化していった。

ある日、散歩中のおじいさんとおばあさんに声をかけられた。ぼくが下ばかり見て、何かを探している様子を不思議に思ったからだ。おばあさんは、近くにある草をむしってきた。「これね、食べれるんだよ。お母さんに、ゆでてもらって食べてみな。あと、この草も。」ぼくと母はおばあさんに教えてもらった草を袋いっぱい採って帰った。家に帰って、調べてみると、それは「カラスノエンドウ」と「イタドリ」だった。ぼくは母に手伝ってもらって、ゆでた草を食べてみた。正直、まずかった。苦いホウレン草の味がした。もしかしたら、もっとおいしい食べられる草があるんじゃないかと探してみたくなった。「ぼくの大好き多摩川自然観察」は、川崎市の科学作品展で参考作品賞をもらった。ぼくはもっと多摩川が好きになった。

5年生になった。ぼくはサッカーで少し行き詰まっていた。がんばっても、がんばってもうまくいかなかった。初めて、サッカーをやめたいと思った。そんな時、母から「これ応ぼしてみる？」と、「水たまキッズ」のぼ集チラシを渡された。「水たまキッズ」は川崎市内の小学5年生を対象にした、多摩川を学ぶサークルのようなものだ。ぼくは母に頼んで、応ぼしてもらった。抽選の結果、ぼくは「水たまキッズ」の一員になることができた。

初めての活動は、多摩川の上流体験だった。八王子市夕やけ小やけの里という場所で、サワガニや虫を探した。真夏なのに、水はびっくりするほど冷たかった。

次の体験は「水辺の安全教室」で、消防署の方たちが川でおぼれた時の対処方法を教えてくれた。ぼくは力を抜いて、あお向けのまま、川の流れに流されるという

技を学んだ。いざ、おぼれた時にその技が使えると思うと、なんだか安心な気がしてきた。

ぼくが一番楽しみにしていた「ハゼ釣り体験」の前に、生まれてから、経験したことのない大型台風が来た。雨と風の音が怖かった。ぼくはインターネットで、多摩川のライブ映像をずっと見ていた。急に、河川じきのグラウンドや友達の顔が浮かんで、心配で眠れなくなった。次の日に、ぼくは母とグラウンドを見に行った。そこは、巨大ないけすになっていた。その日から、ぼく達はそこでサッカーの練習をすることはできなくなった。

「水たまキッズ」の活動の後半は「多摩川水辺の楽校シンポジウム川崎」で発表するため、生き物や町を守る堤防を調べて、まとめることだった。ぼくは生き物の担当で、スジエビやアメリカザリガニを調べた。堤防についても学んだ。日本の歴史では約1500年前から堤防が作られていて、木や石で組み立てられた「聖牛<sup>せいぎゅう</sup>」という装置が使われていたそうだ。

現在、多摩川では「スーパー堤防」という、町の一部の土地を堤防の高さまで上げて、堤防の幅を広げて、もっと安全にする堤防を作っている。

ぼくは大人になったら、堤防をつくるような、多摩川とその周辺の町を守る仕事がしたい。ぼく達のグラウンドが、台風19号で使えなくなってしまった辛い思いを、他の人にはさせたくないからだ。ぼくの夢はいつまでも、大好きな多摩川の自然の中、大切な仲間達と大人になってもサッカーをすることだ。